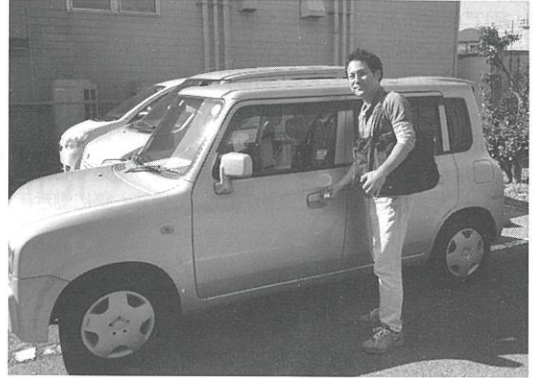


訪問看護ステーション結の樹(ゆいのき) ～訪問の現場で始めて経験したこと～

訪問看護ステーション結の樹は、株式会社いつきに所属する事業所となります。所在地は前橋市六供町です。勤務するスタッフは看護師(常勤4名、パート1名)、理学療法士(常勤2名、パート1名)、作業療法士(常勤1名、パート4)、事務員(パート2)となっています。その他、ヘルパーステーション律の樹(りつのき)、保険外サービス歩の樹(あゆむのき)を運営しています。

訪問業務内容は、勤務時間が9時～18時、1日5～7件(1件あたり40～60分)の訪問を行ないます。弊社では直行直帰が可能なため、スタッフ全員が事務所に集まる事はほとんどありません。そのため、隔週で30分程度のリモート会議を実施しています。また、訪問経過記録や連絡事項は各自のタブレットを活用し、ネット上で情報共有を常に行なっています。

ではここで、2点ほど「訪問エピソード」を紹介いたします。



①良かれと思った練習が裏目に…

軽度左片麻痺。リハ介入当初は左肩の痛みが著明だったが徐々に改善し、屋外歩行T杖にて見守りレベルへ。ある時ご本人より「久しぶりに2階へ行ってみたいわ。少しずつ練習ができないかしら」と相談あり。その当時の私は、玄関での上がり框昇降が見守りで可能なことから、階段昇降練習が可能と判断し実施へ。1ヵ月後、独力で2階に昇れるようになり喜んでいたのも束の間、担当ケアマネから「なぜ階段の練習を勝手にしたのですか??」とお怒りのコメント。

なぜ、私は怒られたのでしょうか?それは、私の考えるベストな状態(残存機能を可能な限り維持・向上し、在宅でご自身が出来ることを増やしていくこと!!)と、ケアマネやご家族が望むベストな状態(日中は独居となるため、転倒なく安全に1日を過ごしてもらいたい)が異なっていたからです。

病院では、セラピストのプログラムのもと、可能な限り患者様の身体機能を向上させ日常生活の自立を目標としますが、在宅では、セラピスト本位のやり方では上手くいかないことが多いです。なぜなら、利用者様を支えるご家族やケアマネの思いも汲み取る必要があるからです。そのため、お互いの合意形成が行えていない場合、良かれと思ってやったことが時にマイナスになってしまうことがあります。

今回のケースでは利用者様の希望(「2階に行きたいわ」)に対して、ご家族やケアマネはどのような判断をするのか?また、仮に2階へ昇るとしたら、どのような条件があれば実施が可能か?などを事前に打ち合わせをした上で、階段昇降の練習をするべきでした。今も忘れられない苦い経験です…

②ターミナルリハと言う考え

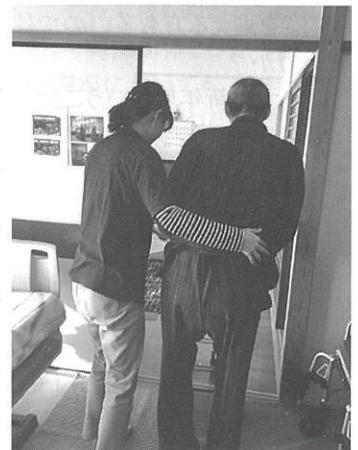
病院で働いていた頃は、週明けに看護師さんから「〇〇さん急変したからリハビリは終了ね」とのことでリハが終了することがありました。そのため、末期がの方や難病の方のリハビリを「亡くなる前日まで行う」と言うことを考えたことがなかったです。しかしながら現在は、訪問看護師さんと連携をとりながらターミナルリハを行なっています。

日に日にできないことが増え、トイレにも行けなくなり、食事も摂れなくなる。それでも私は訪問リハを提供します。何のために?

それは、利用者様から「清村さんに会えるだけで嬉しいの。だからまた来てね」と声をかけて頂いたことがあったから。ご家族から「棺桶に真っ直ぐの身体で入れてあげたいんです」とのコメントを頂いたことがあったから。以前は、何もできない自分自身が無力に感じた時期もありましたが、「何かをしてあげよう」ではなく「何を望まれているのかな?」に思いを傾けリハプログラムを立案する大切さを私は学んだからです。

葬儀に参列する度に「これでよかったのかな」と反省することも多々ありますが、グリーンケアでご家族にお会いした時「故人にちゃんと、ありがとを伝えられたよ」とお聴きできた時は「よし、明日からも踏ん張ろー」とパワーが漲ります!!

訪問リハ、やっぱり楽しいです。ご興味がある方は、ぜひ訪問リハの扉を叩いてみてください。



訪問看護ステーション結の樹 作業療法士 清村秀樹